

対象
小中学生

IN-CHILD® PROJECT

子どもたちの多様な未来を支えたい



IN-Child®

IN-Child® (Inclusive Needs Child) プロジェクトが生まれた背景には、保護者や学校の先生など子どもを取り巻く多くの大人達が、子どもの姿の共通認識に困っているという状況がありました。IN-Childとは、包括的な教育を必要とする子どものことを指します。医療機関での診断の有無に関わらず、学習や生活の中でニーズがあり助けを必要としている子ども、家庭や学校の環境によって一時的にニーズがある子どもも含まれます。つまりはすべての子どもがIN-Childとも言えます。子どもは成長、発達の途中ですので、常に変化する存在であり、環境からの影響を大きく受けることを前提としています。

IN-Child Record™

「今」の子どものニーズは？それを捉えるツールがIN-Child Record™ (ICR)であり、子どものニーズを把握するために「身体面」、「情緒面」、「生活面」、「学習面」の観点から、実態把握を行います（①）。子どもの姿を包括的に見ることが可能で、専門家になるとICRの結果分析に基づいて「IN-Child個別の教育プラン」を作成することができます（②）。2015年から開発が始まり、現在2,000例を超えるデータを収集し、統計分析を経て信頼性・妥当性が検証された科学的な評価尺度です。

1

項目
チェ
ック

原因と結果に分かれた『14領域82項目』

所要時間：5～15分

※初心者約15分、経験者5分程度



step 1

項目のチェック

子どもの情報は『学校の種類』『学年』『性別』だけなので個人情報はありません。項目は、子どもの様子を見たり、思い浮かべたりしながら1～5の5段階でチェックします。

step 2

スコアシート

項目のチェックが終わったら、各領域の合計点数をスコアシートに転記します。このシートによって、ニーズがある領域やそのパターン*などが見やすくなります。

2

専門
家による
分析

【パターン例】

* 科学的方法で検出された値を基準にして、子どものニーズがある領域を明らかにします。また、そのパターンを読むことでニーズや課題が「見える化」できます。ニーズのパターン化には、世界に出回る子どもの実態に適した教育実践報告などから効果があるものを集めて分析し、統計的手法を用いて検証しました。

個人
情報
および
データ
の取
扱

本プロジェクトで得られたデータは、研究および支援事例の蓄積以外の目的で用いることはありません。取り扱う情報はすべて匿名化し、研究結果は個人が特定できない形で学会発表や論文などで公開する予定です。これらの研究の積み重ねにより、多くの子どもたちが最適な支援を受けられることに寄与できると考えておりますので、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

現在、紙媒体と電子版にてデータを収集していますが、ICRが分析に必要とする情報は、「学校の種類」「学年」「性別」「評価点」のみであり、個人情報に該当する内容を含みません。紙媒体で収集されたデータについては施設でできるロッカーで保管し、収集されたすべてのデータは数値化し統計的に処理され、特定のUSBメモリに保存した上で、施設できるロッカーで厳重に管理します。また、統計処理後、一定期間経過後に粉砕・破棄します。ただし、万が一個人が特定できるとされる記載があるデータが収集された場合は、ただちに除外し破棄します。また、成果の報告等においては統計処理後の個人を特定できない数値・記号等からなる情報のみ利用します。

「その子、発達障害ではありません」 レッテルや偏見がない社会をつくる

よく「発達障害のことですか？」と聞かれることがあります。

違います。IN-Child®は発達障害ではありません。

もちろん本当に医療機関の助けを必要としている子どももいますが、そもそも障害の診断は医者しかできないことです。周りの大人が安易に、子どもに「発達に障害がある」と決めつけることがどれだけ理不尽でキケンなことなのかを理解しなければなりません。IN-Child®はそんなレッテルや偏見を取り払い、子どものニーズに焦点を当てて対応することで、子どもをいきいきと教え育てる社会をつくりまします。



発達プロセスにいる子どもの「今」を大事に、 その時々への対応が「将来」につながる

昨今、発達障害という言葉が独り歩きしていますが、そもそも人間の発達に標準はありません。

特に子どもが様々な発達の姿を見せていることは当たり前であり、ニーズだって変化します。ICRを使うことで「今」のニーズを知り、適切かつ具体的な対応につなげることができます。さらに、継続的な使用は、今の対応が合っているのかというフィードバックや、新しく生まれたニーズの早期発見にも活かします。その時その時でニーズが無くなれば別のニーズへ対応するなど、柔軟で迅速な対応がその子の「将来」につながるのです。

大人の枠にはめない —“子どもの枠”で子どもを見て、育てる

子どもが家庭や学校で見せている姿をそのままチェックしていくので、大人の主観ではなく子どもの目線に立った客観的な評価ができます。今まで気が付かなかった姿が見えてくることもあります。

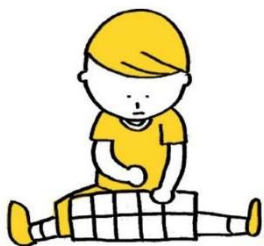
また、ICRを使い続けるだけで子どもを見る力がつくため、大人の教育経験や専門性に左右されずに実態把握ができます。



地域社会で育てるための “コミュニケーション”ツール

子どもは家庭と学校で見せる姿が違えば、担任と教科の先生で違うこともあります。そこで、ICRを共通言語にすることによって、子どもに関わる大人たちの目線を合わせることができます。

また、病院や学童、デイケアといった学校以外でも、ICRが共通言語となり情報共有のハードルを下げることができると期待しています。難しい専門用語や分野の壁を超えて、子どものためにできることを共有し、連携を円滑にすることができます。



IN-Childの公式ホームページはコチラ
<https://www.in-child.com/>

博士 韓 昌完/ハン チャンワン(HAN Changwan) 琉球大学教育学部 教授
E-mail : inchild.pjt@gmail.com